初期映画理論の美学と倫理 中川重麗、ヒューゴー・ミュンスターバーグ、コンラート・ランゲ、谷川徹三

篠木 涼

本論は、第一に、最初期の映画理論の作者コンラート・ランゲ、そしてヒューゴー・ミュンスターバーグそれぞれの理論を美学と倫理の観点から分析すること、第二に、彼らの理論の日本での受容者・紹介者であった中川重麗、谷川徹三による受容の脈絡とその後の彼ら自身の批評・理論の展開を明らかにすることである。したがって本研究は、批評史的研究と理論研究の部分をもつ。ランゲ、ミュンスターバーグについては理論研究が主となり、中川重麗と谷川徹三については批評史的研究が主となる。

本論文は次のような構成をとる。初めに年代的にもっとも早い時期である中川重麗を取り上げ、第一章において十分に歴史的記述がなされていなかった中川重麗という人物の輪郭を描写する。第二章において、中川重麗の近代美学受容と彼の「不離不足の美学」、そして映画論を考察する。次に第三章ではヒューゴー・ミュンスターバーグの哲学的美学と倫理学の映画理論への影響と映画論執筆時の文化論的状況から、『映画劇』に見られる倫理・道徳と美学・物語論の関係を考察する。第四章では、ミュンスターバーグが生理学からの実験心理学者として行った芸術あるいは美学についての考察を踏まえることで、『映画劇』における「映画の観客への影響」の議論が、従来考えられていたような心あるいは意識と映画形式との対応にとどまらない身体論的な含意のあることを明らかにする。第五章は、従来考察されてこなかった『映画――その現在と未来』における「倫理・道徳的なるもの」を中心に読解することで、ランゲによる芸術的な叙述と映画的な叙述の対比が、その中心に「倫理・道徳的なるもの」をすえており、ベンヤミンに先んじたメディア論的な含意を備えていることを明らかにする。第六章では、1910年代から1920年代におけるランゲとミュンスターバーグの日本の映画批評における受容を考察する。ここではそれぞれに理論が執筆された脈絡が受容によって失われながらも、同時にテキスト自体の読解においては成熟した読解がなされていたことが明らかになる。第七章は、谷川徹三の1920年代から1940年代までの批評を考察することで、深田康算、三木清、戸坂潤ら同時代の思想家との関係から独自の批評的位置を明らかにしていくことになる。